Sir William Dugdale を取り巻くアンティクエリー理解者たち
～ *The History of St. Paul's in London*（1658）の出版に関して～

高野 美千代

Sir William Dugdale and his Friends:
Publishing *The History of St. Paul's in Londo*n (1658)

TAKANO, Michiyo

Abstract

Sir William Dugdale was an antiquary who devoted himself to the recreation of the past in his writings. He was the author of renowned antiquairian studies such as *Monasticon Anglicanum, The Antiquities of Warwickshire*, and *The History of St. Paul's Cathedral in London*, which were published in the 1650s. His exceptional diligence allowed him to complete all these learned works, but of course it was not at all possible without the aid of other people who supported him by providing documents, introducing people, or even partially bearing the expense of publishing his books. This study aims to examine the relationships between Dugdale and those who supported him, especially in terms of the publication of *St. Paul's*. By so doing we hope to cast light on the social milieu of antiquarian studies in the Commonwealth of England of the 1650s.

Key words : William Dugdale, *The History of St. Paul's in London*, antiquary, antiquarian studies

はじめに

ウィリアム・ダグデール卿（Sir William Dugdale, 1605-86）は 17 世紀英国の主要アンティクエリー（好古学者）のひとりである。アンティクエリーは過去について強烈なキュリオシティーを持ち、主に古い文献資料や遺跡碑文などを精査することによって、過去を著述として再現しようと試みた。英国の好古学研究の歴史を遡れば、エリザベス朝イングランドにおいて、国の繁栄、ナショナリズムの高揚などにより、母国英国の過去を解明しようという意識が生まれていった。その背景には、アングロサクソン語の理解が進み、ローマ人の影響を受けないサクソン教会の歴史が明らかになるなど、好古学研究が発展するにふさわしい状況の整備があった。そのような中でウィリアム・カムデン（William Camden, 1551-1623）の *Britannia* (1586, 初の英語訳版 1610) が世に出され、好古学研究が進展を遂げ始めた。ダグデールもカムデンに影響を受け、また、周囲の人々の援助を得て、アンティクエリーとしての作品執筆を進めた。

アンティクエリーの仕事とは何であったのか、それを象徴する彼の肖像（部分、図 1）に注目し

図 1

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニケーション学科
Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

てみよう。ダグデールの手元にはおそらく羊皮紙でできたマニュスクリプトがあり、背後の書棚にも古い文献資料が乱雑に置かれているのがわかる。一方で、彼の脇にある製本された書物は自身の著作である *Monasticon Anglicanum* (1655) と *The Antiquities of Warwickshire*（1656）であることが、タイトルの文字から判断できる。膨大な古いドキュメントを精読し或いは判読／解読して、過去の社会の構造、地理、言語、宗教、風習を解明し、著述によって再現することが、アンティクエリーの使命であった。過去への興味がヒストリオグラフィーとして定着する時代に書かれたアンティクエリアン・スタディーズは、文学と歴史の融合ともみなすことができる。[1)]

アンティクエリアン・スタディーズは、文学と歴史との融合という点で新たなジャンルを築いたと考えることができる。ただ、反対にその曖昧さによってこれまで研究が進みにくかったことも否定できない。これら 17 世紀の好古学書は長いこと注目を浴びてこなかったが、グレアム・パリーによる近世英国アンティクエリーについての金字塔的研究書 *Trophies of Time*（Oxford, 1995）をきっかけに、ウィリアム・カムデン以降のアンティクエリーへの関心が高まり始めた。パリーはこの研究書の中で、カムデンをはじめ、リチャード・ファースティガン、ヘンリー・スペルマン、ジョン・セルデンなどのアンティクエリーを扱い、17 世紀イギリスの新たな文学的領域であるアンティクエリアン・スタディーズの全体像を提示した。[2)] ダグデールについても一章を割いて、*Antiquities of Warwickshire*、*Monasticon Anglicanum*、*History of St. Paul's* (1658) および *Baronage of England* (1675-76) の 4 作品を歴史的・思想的コンテクストから読み解いている。[3)] パリー以降、ダグデールの主な研究は、版画家ホラーの挿画によるヴィジュアル的効果に注目したマリオン・ロバーツによる考察や、生誕 400 年および *Antiquaries of Warwickshire* 出版 350 年を記念して開催された学術会議の副産物となる研究論文集がある。この研究書はダグデールの作品自体を検討するほか、同時代の地域社会、文化、政治等を扱う。さらに 2011 年にはジャン・ブロードウェイによるバイオグラフィーも出版された。[4)] ダグデールを含めたアンティクエリー研究は 1995 年以来脚光を浴び始めているものの、未だ掘り起こされるべき作者作品も数知れず残っている。その理由は明白であり、すなわちこの研究対象となる作品群が歴史、文学、地誌学のいずれにも関連する部分を兼ね備え、大抵の作品が膨大なページ数から構成される上に極めて理解が困難な表現を含み、さらに当時の歴史観や思想的・宗教的背景が複雑に絡み合っているからだと言えよう。細かな資料の解読・分析が主体となるアンティクエリーの仕事のように、現在国外におけるこの分野の研究は徐々にしかし着実に進行している。

一方、日本国内ではダグデールの詳細な研究は未だほとんどないという現状であるため、まず主要作品の位置づけが必要であろう。この小論においては、彼の *History of St. Paul's*（以降『聖ポール』と記載する）にとくに焦点を絞り、その執筆から出版までの背景となる事情を明らかにしていきたい。『聖ポール』はダグデールの作品の中でも際立って普遍的価値が高く、さらにホラーの挿画とのコラボレーションにより芸術性においてもイギリス書物史上、頂点を極める書物と言うことができる。『聖ポール』は出版当時の共和政時代において機能していなかった英国国教会のシンボル的聖堂であった聖ポール寺院の歴史と建築を詳述し、教会に対する著者の畏敬の念を表したものである。清教徒がむしろ聖堂を破壊しようとした時代において、聖堂の歴史と美を維持しようとする書物をダグデールが著したその背景には、この出版を援助しようとする多くの支持者が存在したはずである。本論においては著者の周辺を考察する方法として、ダグデールと友人が交わした書簡やその他歴史的記述に注目しながら、彼の作品を完成させるのに協力した幾多の理解者との関係を解明し、その援助なしに彼のアンティクエリーとしての業績が達成されることはなかったことを証明する。

I. ウッドの記述とダグデールの『聖ポール』

17 世紀好古学者として著名なアンソニー・ウッド（Anthony Wood）は、彼の *Fasti Oxonienses*（1692）の中で、フォリオの 5 ページを割いてダグデールの生涯と作品について書いている。グレアム・パリーによる *Dictionary of National Biography* のエントリーを含め、現在までウッドによるこの記述がダグデールの伝記的情報の拠り所になっている。

ウッドによれば、ダグデールは 1605 年にウォリックシャで生まれた。生誕したとき、庭にミツバチが集まっていたので、これは生まれた子が勤勉さゆえに成功するという予兆だとする人もいた。大学で学びはせず、生来好んでいた歴史と好古学研究に独自でいそしんだ。ダグデールにとって最初の好古学研究理解者であるサミュエル・ローパー（Samuel Roper）との出会いを皮切りに、ウィリアム・バートン（William Burton）、サイモン・アーチャー卿（Sir Simon Archer）とめぐり合い、好古学研究を進める上での助けを得るようになった。そして 1630 年代終わりに政治家クリストファー・ハトンと出会っている。

『聖ポール』はこのクリストファー・ハトン卿に献呈されている。実は『ウォリックシャ』の献辞もハトンに対して書かれているので、2 作連続で同じ相手に謝意を表していたことになる。『聖ポール』献呈の辞の中でダグデールは、ハトン卿の援助があって自らの計画が命を得たと言っている。具体的にどのようなサポートを得て出版まで至ることになったのであろうか。ハトンとの出会いは 1638 年、ダグデールが 33 歳の頃である。王室にも近い有力者であったハトンは、ダグデールに財務府とロンドン塔所蔵の古文書へのアクセスを手配した。それに加えてハトンはダグデールがヘラルド（紋章官）になるために口添えをしている。この地位を得ることにより、仕事場や収入も得ることとなり、ダグデールにとってはアンティクエリーとしての作業に専念するための環境が整ったことになる。

献呈の辞の中でダグデールが明白に語るのは、ハトンへの感謝と『聖ポール』執筆の動機である。冒頭においては「無知で議論好きな輩が神を語るようになるだろう」というウォルター・ローリーの言葉を引用し、40 年前のローリーの危惧が現実となっている今、教会から秩序も機能も失われていることを嘆いている。同じ危機感を持つハトンから重要な教会の碑文等を記録するよう勧められたことがきっかけで、ダグデールは調査を行い、キリスト教建築の中でも最も卓越したものに数えられる聖ポール寺院の歴史と構造を書物にまとめることができた。これもハトンの支えによるものという謝意を表している。

ウッドが記している通り、ハトンはアンティクエリー研究に大いなる興味と関心を抱き、さらには迫りくる清教徒の圧力に脅威を感じていた。それゆえに彼はダグデールに対して、聖ポール寺院をはじめとする主要教会においてモニュメントの記録を残すように勧め、実際に 1641 年、ダグデールは紋章画家の一人を同行して聖ポールおよびウェストミンスター寺院内部のモニュメントの碑文すべてと窓の紋章等を正確に写し取る作業を行った。これがあったために 1650 年代の『聖ポール』執筆はより円滑に短期間で終了したのであろう。

さらにハトンは『聖ポール』のサブスクライバーとしてプレートの印刷費用も負担している。このモニュメントはエリザベス朝に大法官を務めた人物のもので、ハトンはこの人の後継者として莫大な遺産を相続している。血縁のある人物の墓碑のプレート作成代を負担するケースは特徴的なことである。

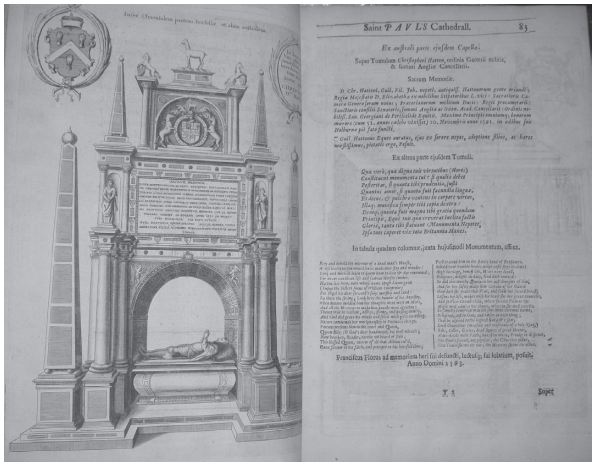

図 2

ここに示す図２においては、見開き左側ページにそのプレート、右側ページには墓碑のインスクリプション（この墓碑の場合はさらに英語訳まで）が書かれている。そこにはエリザベス朝の大法官であったクリストファー・ハトン（ダグデールのパトロンとは同名）への賛辞が刻まれ、彼がエリザベス女王に実力を認められ、寵愛されたことが記されている。さらに言えば、イギリスが繁栄を続けたエリザベス朝は共和政時代のロイヤリストにとっては憧憬の対象となる時代となっていた。このモニュメントは教会の内陣、奥の南側に位置していた。従兄弟のウィリアム・ハトンが 1591 年に建立したものである。

1656 年、とある人物との偶然の出会いによって聖ポール寺院の古い資料を調査する機会を得たダグデールは、その後２年のうちに資料をまとめて出版まで漕ぎつけたのだが、ウッドはダグデールの『聖ポール』執筆の目的とこの本の特徴を次のように説明する。

> And to the end that the memory of those many Ancient monuments therein, which were afterwards utterly destroyed (the Church also being made a Horse-garrison by the Usurpers) might be continued to posterity, Mr. Dugdale did by the help and favour of sundry worthy persons, who voluntarily offered to be at the charge of the plates, in which the Representations were cut in brass, as also the prospects of that whose Fabrick (inside and outside) accomplish the same. Further also having succinctly framed an historical narration of the first foundation and endowment of the said Church, as also of all the Chantries, and what else was most memorable therein, or relating thereto, made it publick by the Press, an. 1658.

> のちにすっかり崩壊してしまう多くの古いモニュメントの記憶を（教会の内部はまた簒奪者たちによって馬屋とされていたのだが）後世に残すという目的のために、ダグデール氏は（聖ポール寺院に関する資料のまとめを）行った。そこには進んでプレートの費用を負担した様々な尊敬すべき人々の援助と好意があった。プレートにはモニュメントの描写が銅板に刻まれ、また、聖堂のプロスペクトも内と外の両側が刻みこまれた。さらには教会の最初の創立と基本財産、寄進によって建てられたチャペル、その他関連するもっとも記憶すべき事柄についての歴史的叙述が簡潔に行われ、1658 年、印刷物として公開されることとなった。[5)]

アンティクエリー研究で顕著な才能を持つダグデールに、『聖ポール』のような書物を著してほしいと期待を寄せる人々は多かったに違いないが、実際にここで言うところの版画プレートの費用を負担した「尊敬すべき人々」は 40 名を超えた。

II. 『聖ポール』の出版とダグデールの周辺

『聖ポール』はロンドンのシティ地区に位置する聖ポール大聖堂の歴史と当時の状態を詳述した作品であり、1658 年に出版された。上のウッドの記述からの引用にあった通り、この書物でダグデールが記録に残したものは創設から 17 世紀までの聖ポール寺院がどのように国王や貴族から恩恵を受けてきたか、なんという首席司祭、主教らが教会の伝統を守ってきたかということである。時の経過とともに増築や部分的な崩壊や改修など、教会の建築構造も変わった。構造の大部分はホラーの見事な版画によって記録されている。しかしこの書物に残された聖ポール寺院は、出版から８年後の 1666 年、ロンドンの大火で焼失した中世のゴシック様式による聖ポール寺院である。ロンドンの町は大火のあとすっかり様変わりし、ヨーロッパ大陸の都のごとくルネサンス様式が主流となった。ゴシックはもはや時代遅れであり、大火後にはあえてゴシック様式での聖堂再建を求めるよりも、大陸の様式を学んだクリストファー・レンによるバロック建築が望まれた。したがって、現在の聖ポール寺院はダグデールが題材とした聖

ポール寺院とは外観が全く別のものであり、ダグデールの書物こそが中世の聖ポールの姿を現在まで詳細に伝える唯一のドキュメントとなっている。写真技術以前の時代でありながら、ホラーの数十点に及ぶ精巧な版画から、聖堂の外部と内部に関する極めて詳細な情報を我々は得ることができる。

『聖ポール』の出版者はトマス・ウォレン(Thomas Warren)である。有力書籍商としては情報が少なく、伝記的事項において不明な部分も多いが、彼と比較すればより著名なジョシュア・カートン（Joshua Kirton）のパートナーであったとされる。[6] ダグデールの『ウォリックシャ』も扱っており、その他の主な出版物にジョン・オグルビー(John Ogilby)の *The Works of Virgil*（1654）やウィリアム・カムデンの *Remains Concerning Britain*（1657）等がある。前者は豊富な版画によるイラストレーションを含む高価なフォリオであった。出版に必要な多額の費用をまかなうため、サブスクリプション出版の方法を採って版画プレートに対する費用負担を募り、出版を実現させた例である。オグルビー自身、出版業者でもあったため、出版の実際的知識は十分に備えていたに違いない。また、特にこの時代は、版画にサブスクライバーの紋章、氏名、モットーなどを刻み、さらに出来上がった書物も受け取るというイギリス独特の方法によるサブスクリプション出版が主流であった。[7] ダグデールの書物も同様に出版されており、ウォレンはこの方法に精通していたのかもしれない。後者はカムデンの『ブリタニア』に関連する文献資料類をまとめたもので、オクテーボ判ながら幾多の挿絵を含む書物である。これらのタイトルから判断して、ウォレンは文学・好古学書の出版に特に力を入れていたと考えることができる。なお、1661年には妻のアリスが店を継承し、*Monasticon* 第2巻（1661）には彼女のインプリントがある。したがってトマス亡き後、妻のアリスもダグデールの書物を出版していたことになり、ウォレン夫妻とダグデールは親交があったに違いないのだが、それを示す資料は残念ながら存在していない。

聖ポールの出版を資金面でも支持した面々がサブスクライバーリストから明らかになるが、サブスクライバーの中には複数のプレートに資金を提供した例もある。アンティクエリーであったり、ロイヤリストとして同じ思いを共有していたりするなど、サブスクリプションに協力した理由は様々である。『聖ポール』の版画のサブスクリプションは5ポンドであったが、40名を超えるダグデールの友人が支援の手を差し伸べている。ひとりで複数枚の版画に対し資金を負担したケースもあるが、最も枚数の多い例はサー・ジョン・ロビンソン（Sir John Robinson）が寺院のプロスペクト（外観）を東西南北の各方向からとらえた版画4枚、計20ポンドを負担したものである。

ロビンソンがサブスクライバーとなった4枚のうち3枚はフォリオ見開き2ページにわたる大型の版画であり、芸術的な価値の高さはもちろんであるが、焼失前の聖ポール寺院の全貌を知る上でまさしく貴重な資料となっている。ロビンソンは個人的には商人として成功し、さらにはロンドンの地方自治に携わった人物であるが、実はその家系は宗教的な影響力を持っていた。国教会司祭であった父親は、スチュアート朝における英国国教会を代表する大司教ウィリアム・ロード(Archbishop William Laud)の義兄弟にあたり、ロビンソンがロードのために『聖ポール』出版に多額の資金提供を行ったことは明らかである。ロードこそが高教会派の代表的人物であり、1628年にロンドン主教となって以降1630年代を通して

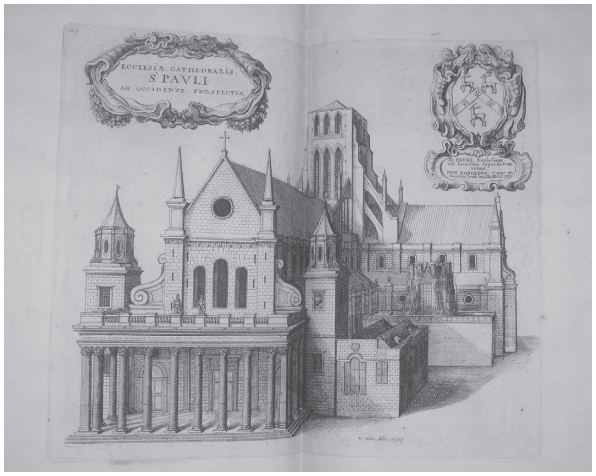

図3

聖ポール寺院の修復に熱意を持ち続けた。ロイヤリストの間でロード全盛期への郷愁は大変強いものであったし、実際に4枚の版画のうち2枚にはインスクリプションにロードの名が残され、栄華を誇った英国国教会の過ぎし日の記憶を書物の中に刻み込んでいる。

これは寺院西側のプロスペクトである。建築家イニゴ・ジョウンズによる正面入り口の柱廊（ポーチコ）がその全貌を現わし、さらにその上にはスチュアート朝の2人の王の像がそびえ立つ。当時のロイヤリストからすればもはや幻となった英国国教会最盛期の具現図であったと言えよう。この版画ではインスクリプションに名前こそないが、ロード大司教の影響力は建築そのものに現れている。彼が推進した聖堂の修復の一環で実現した西側のパラディオ様式のポーチコは、当時ヨーロッパでも有数の美しさを誇るものであった。[8] ところが、『聖ポール』制作段階の1650年までには見る影もないほどの姿に変わり果てていたのである。実際にはそれをさらに遡る時代から教会が世俗的な用途に供されていたのだが、当時ポーチコには露店が立ち並び、市民は日常の雑務のために教会に出入りしていた。教会の荘厳さに畏敬の念を持ち、あるいはパラディオ様式の柱廊を誇りに思った人々が存在する一方で、一般には多くの市民が生活の営みの一部として教会を宗教とは全く別の目的で使用していたという事実がある。ホラーの版画には当時の風俗を伝えるものは一切なく、生きた人間の姿や周囲の風景は描かれていない。あくまでも後世に残すべき教会の姿だけが刻み込まれている。

共和政時代にビジネスで成功したロビンソンは、オリバー・クロムウェル（Oliver Cromwell）の下でロンドンの長老議員（alderman）となっていたが、クロムウェルの死後はロイヤリストとして王政復古の実現のために尽力した。『聖ポール』の出版はクロムウェルが没する以前のことであり、出版の準備はそれをさらに遡るわけだが、水面下でのロイヤリストのつながりは共和政時代にあっても堅固であったとこの例からも考えることができよう。

たとえばロビンソンのような裕福な商人は、20ポンドの負担をして4枚の版画の挿入に協力した。さらに彼はウィリアム・ロード大司教のような著名人を叔父に持つという家系に生まれてもいる。その一方で、紋章など持たない一学者が多額の資金を負担して、見事なプレート挿入に寄与した例もある。トマス・バーロウ (Thomas Barlow) はオックスフォード大学図書館長で、学識豊かな人物であり、しかし紋章を持ってはいなかったため、インスクリプションのみが刻まれている。バーロウがダグデールにつぎのような書簡を送っている。これは1656年9月26日付の書簡であり、この頃までにはサブスクリプションの通知が行われていたことがわかる。

> I receaved your's, wherein you tell me the Plate will stand me in 5li. I shall not question the price, soe it be well done. I know Mr. Hollar is an excellent person, and deserves all incouragement, nor shall I be wanteinge, or unwilling to pay him li berally for his labour, onely be you the Judge, and what you say, I will send; and that when and whither you shall appoint. I have sent this inclosed paper, if you like it. Armes I have none (nor deserve any) and therefore refer the whole to you, to have all these words, or as many of them as you shall thinke fit, ingraven on the Plate, and with what devise you shall thinke fit, onely I desire to see it, ere it be finished, soe as not to be altered.

プレートの費用が5ポンドであるとの手紙、拝受しました。良い仕上がりであれば値段のことは何も申しません。ホラー氏は優秀な人物であり、このような張り合いに値する人です。私自身も困窮しているわけではなく、ホラー氏の仕事に十分な支払いをすることを厭うはずもありません。あなたが判断を下してくだされば、それだけのものをお送りしましょう。いつ、どちらへ支払えばよいかも示してください。よろしければと思い、ここに

1枚の紙を同封します。私に紋章はありません（それにふさわしくもありません）から、ここに書いた言葉をプレートに刻んでください。適当と思われる分量と形にすることはあなたにお任せします。ただし、間違いがあるといけませんから、完成前には一度目を通させてください。[9)]

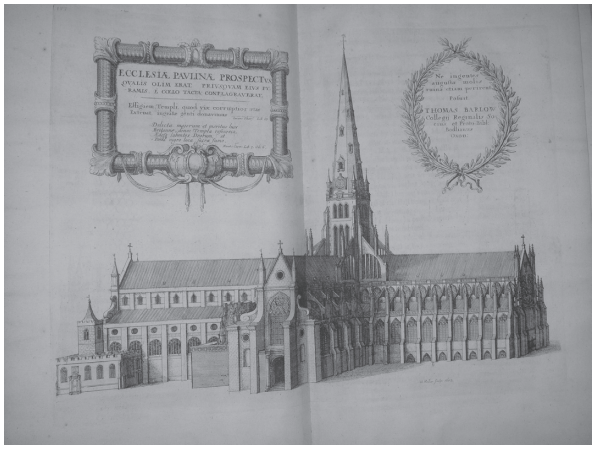

図４

上の図４はバーロウが負担したプレートで、南側プロスペクトであるが、この聖堂の姿は当時の実際のものと異なっている。そのことは『聖ポール』本文から知ることができる。イメージ図は実際の姿と異なる部分の詳細を歴史的資料から分析検討するか、あるいはさらに古い時代に描かれたデッサンを模倣して作成されたはずである。このようなイメージ図がこの書物の中で使用された理由は何であったのだろう。図４は聖堂の北側をとらえたものだが、第一に尖塔が存在することが目に付く。図３にはなかったものだ。この尖塔は1561年に落雷で焼失していた。その代わりに当時はゴシック建築には不釣り合いな屋根が載せられていた。手前に見える翼廊も、実は当時すでに屋根が落ちてしまっていたはずである。理想的な構造とはかけ離れた実際の教会の姿ではなく、中世のバロック様式で完全な形に描かれた教会像をバーロウは自ら望んだのであろうか。これを考えるとき、一つの疑問が浮かび上がる。それは、サブスクライバーの意向が版画の制作にどれだけ反映されたのか、ということである。

ダグデールとバーロウは内乱中の1640年代から既知の間柄であった。ボドリアン図書館の司書であったバーロウとダグデールはその頃からアンティクエリー研究に関する興味を共有していた。1640年代のオックスフォードにはその他多くのアンティクエリーが集まり、情報交換を行いながら研究を進めていた。オックスフォード大学の古文書館館長を務めていたジェラード・ランベイン(Gerrard Langbain)もそのグループの中にいた。

ランベインはアンティクエリーとして有能な学者であり、同時に古文書館館長として他の研究者に対して大変有用な助言を与えることができる人物であった。ダグデールには特に『モナスティコン』執筆の際、力添えを行っている。親しい間柄にあった二人であったが、ランベインが1656年5月にダグデールに送った書簡には次のような一節がある。

> For the piece I intend and promised you to give the sculpture of, to help out wth yr Edition of the monumts of Pauls, I doubt whether I shall be in London to make my owne choice of such as are best, but rather referre it to yor self, with this caution, that I wold have some of the historicall pieces (not any prospect of the Church) and amongst those, should be willing to have (if such there be) some that hath bene an emint man of this Unity, B'p, or other.

> 版画を寄付して聖ポールのモニュメンツに関するあなたの著作の出版に力添えをしようと考え、あなたにそうお約束した件ですが、私自身がロンドンに行ってどの版画が最適であるかを選択することができないのではないかと思います。したがって、あなたに決定をお任せしますが、以下のことだけ申し上げます。私は教会のプロスペクトではなく、歴史的な題材のものを希望します。もしあればですが、オックスフォード大学に関係する著名人や司教などの版画を是非に、と思っております。

この書簡から推測できるのは、版画の題材は最低

でもリストアップされるかあるいは下絵などが用意されていて、サブスクライバーは実際にそれを見て選択する可能性があったということである。ランベインの場合、13 世紀の 2 人のロンドン司教のモニュメントのプレートのサブスクライバーとなっている。したがって、『聖ポール』のプレートは、この書簡で示された本人の意向に沿った選択であったと言える。

そこで、プロスペクトを示す版画についての考察に戻ろう。見開き 2 ページにわたる見事な教会の全体像はバーロウのもの以外すべてバロック様式の屋根を欠いている。つまりバーロウのプレートのみが完全な中世バロック建築となっているが、これを彼が自ら選択したのかは残された書簡や日記等から探ることはできない。したがってバーロウの意思が反映された選択であったかどうかを判断する場合、仮に導き出す答えが推測の域を超えないことは否定できない。が、少なくとも彼はダグデールにインスクリプションを差し出してはいた。『聖ポール』全体に共通する遺憾の念が表れた古典からの引用文である。実際に刻まれたのは 2 種であり、ひとつはルカヌスによる “Effigiem Templi quod vix corruptior aetas / Extruat ingratae genti donavimus”、もうひとつはホラティウスによる “Delicta majorum et meritus lues / Britanne donec Templa refeceris / Aedesg labentes Deorum et / Faedd nigro loca sacra fumo” である。ルカヌスの『ファルサリア』はポンペイウスとカエサルの衝突をテーマにしたもので、崩壊する共和政を悲観してうたったものである。また、ホラティウスの『歌章』は内乱時代のローマ人の不安を扱う。この二つの引用はともに堕落した時代における教会が本来の静寂や美を失った状態であることへの悲嘆を表す。これを踏まえれば、完全な状態の教会の姿を版画で見せる一方で、現実の状態を嘆くインスクリプションを並列することによって、そのギャップを強調する狙いがあったのは確実だと言えよう。それが著者ダグデールの意図であったのか、サブスクライバーのバーロウの意図であったのか、それを知る術は現時点ではない。しかし、版画の完成前には目を通したいというバーロウの希望が叶えられていたのならば、相互に納得した上で挿入されたプレートであることには違いない。[10)]

まとめ

ダグデールの肖像を再び見ることにしよう。この肖像はそもそも *Antiquities of Warwickshire* の出版の際、ホラーによって製作されたものである。下の部分にラテン語のインスクリプションがある。これはオヴィディウスからの引用で、“Neseio qua natale solum dulcedine cunctos / Ducit et immemores non finit esse sui.”「祖国の地というものは、何かはかり知れない魅力によって人を惹きつけ、忘れさせることはない（黒海からの手紙、第 1 巻第 3 歌 35 ～ 36 行）」と意味する。オヴィディウスはローマを追放され、流刑地であるトミスにおいてこの書簡詩を綴った。詩人は自らが故郷を離れた地にあって、心の平安を失い、二度と故郷には戻れないという絶望感に襲われていた。老いつつある現実を書簡の中で家族や友人に伝えながら、悲嘆にくれつつも祖国への愛をうたっている。

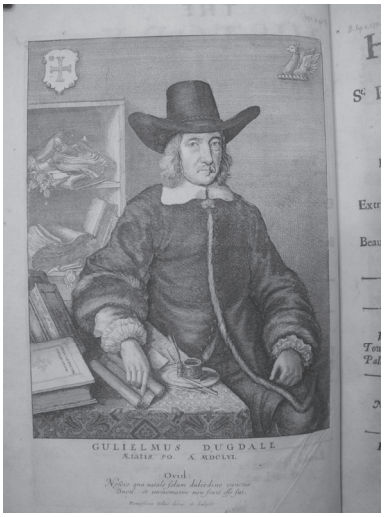

図 5

ダグデールがオヴィディウスのこの引用を選んだ理由は何であったのだろうか。ひとつの理由としては、パトロンのハトン卿の状況が重なり合ったという可能性が考えられる。つまり共和政時代にロンドンを出てフランスにいたハトン卿を思うとき、故郷を遠く離れていたオヴィディウスが作

品に綴った情念が一層ダグデールの心に響いたのかもしれない。ハトンは共和政時代のほとんどをフランスに亡命して過ごしている。イギリスへの帰国を禁じられていたわけではないが、祖国を離れていたハトンは「黒海からの手紙」を認めていた頃のウェルギリウスの心境にも似た気持ちであったかもしれない。また別の観点からとらえるなら、この引用はダグデールのアンティクエリーとしての決意を表す言葉とみなすことができる。時の経過によってあるいは時勢の変化によって失われゆくであろう過去の遺物を精査し、書物に収めていくのがアンティクエリーのつとめであった。彼らにとって祖国あるいは故郷の過去を再現することが自らに課した責務であったし、ダグデールは生まれ育ったウォリックシャ、あるいは信奉する英国国教会の繁栄を象徴する聖ポール寺院の歴史を残すために精力的に働き、功績を残した。*Monasticon* や *Baronage* についても膨大な資料を調査分析して出版までこぎつけることができたわけだが、それは祖国、故郷への愛が原動力となっていた。扱う資料の分量からしても、このような一連の大作を単独で著すのは限りなく不可能に近い仕事であったことは言うまでもない。言い換えれば、同じ決意を持つ人々の力添えによって完成を見た業績である。同時代のアンティクエリーのネットワークはまさしく強固であったと言うことができる。ダグデールがオヴィディウスと共通して抱いたのは、喪失への不安感でもあったかもしれない。しかし、失われつつある祖国の歴史や伝統、人々の営みを文字にとどめた背景には共通して故郷への強い愛があったと言えよう。

『聖ポール』はサブスクライバーだけでも 42 人を数えるため、この小論で扱った人数はごく一部に過ぎないのであるが、ダグデールの『聖ポール』が出版されるまでに幾多の人物の援助と理解が不可欠であったことは確かである。共和政という時代において特に結集した力がこの歴史的作品を創造し、産出することになったのである。

註

1）山梨大学佐藤正幸教授との議論の中でヒストリオグラフィーとアンティクエリアン文学との関連を示唆していただき、このような認識に至った。

2）「アンティクエリー（antiquary）」は日本語では「好古学者」あるいは「古物研究／蒐集家」などと訳されることが多いが、その実態は曖昧である。「考古学者（archeologist）」と混同されやすいが異なるものであり、しかしながら一部重なる部分もある。発掘調査を主とする考古学研究とは研究方法とプロダクトの部分に明白な相違点がある。ただし、現在の用語で言うならば、その違いは非常に曖昧になってきている。たとえば英国の学術団体“Society of Antiquaries”で発表される研究論文などには、近年むしろ考古学的色彩の強いものが含まれている。

3）*A History of Imbanking and Drayning of Diverse Fennes*（1662）についても言及はされているが、執筆動機の相違もあることなどから、その他のダグデールによる好古学書とは一線を画した作品として扱われている。

4）Marion Roberts, *Dugdale and Hollar* (Newark: Delaware UP, 2002) ではダグデールと同じ比重でホラーを扱っている。Christopher Dyer and Catherine Richardson, eds, *William Dugdale, Historian, 1605-1686*（Boydell, 2009）では 10 数点の論文を収めるが、ダグデールの出身地でもあるウォリックシャの歴史・地誌など幅広い事項を扱い、必ずしもダグデール個人や彼の作品を批評・分析する論文に限らない。Jan Broadway による *William Dugdale: A Life of the Warwickshire Historian and Herald* (Xmera, 2011) は初めての長編バイオグラフィーと言える。この小論における伝記的情報は William Hamper による伝記（1827）および *Oxford Dictionary of National Biography* 中のエントリー（パリーによる記述）に拠る部分が大きい。

5）Anthony Wood, *Fasti Oxonienses* (1691), p.697. 日本語訳は筆者による試訳である。

6）Henry Plomer の *A dictionary of the printers and booksellers who were at work in England, Scotland and Ireland from 1668 to 1725* 参照。

7）Antony Griffiths *The Print in Stuart Britain, 1603-1689* (British Museum, 1998), pp. 184-192 参照。

8）ヨーロッパ大陸の様々な建築物に精通していたジョン・イーヴリン (John Evelyn) は、“A Character of England” においてロンドンの聖ポール寺院が当時のヨーロッパにおいて最も優れた例であることを述べた。*The Writings of John Evelyn*, edited by de la Bedoyere, (London: Boydell, 1995), p 79.

9）この論文で扱う書簡は William Hamper によるエディションの *The Life, and Correspondence of Sir William Dugdale* (London: 1827; rpt. 2007）から原文をそのまま

のスペリングで引用し、日本語訳は筆者による試訳とする。

10）血縁関係に当たる人物のモニュメントを書物に収めるため資金を提供したケースは確かに目立つのであるが、プレートとサブスクライバーの関係は単にそれだけではない。現時点では個々のプレートとサブスクライバーの関係を探る情報資料が不足しているため、今後継続して調査を行い、その意味を考察したいと考える。

主要文献

Text:

Dugdale, William. *Baronage of England*. 2 vols. London: 1675; rpt. 1977.

---. *Monasticon Anglicanum*. 3 vols. London: 1718 − 1723; rpt. 2007.

---. *The Antiquities of Warwickshire*. London: 1656; rpt. 1765.

---. *The History of St. Paul's Cathedral in London*. London: 1657.

Secondary sources:

Broadway, Jan. *William Dugdale: A Life*. London: Xmera, 2011.

Dyer, Christopher, and Catherine Richardson, eds. *William Dugdale, Historian, 1605-1686*. London: Boydell, 2009.

Globe, Alexander. *Peter Stent, London Print Seller*. Vancouver: U of British Columbia Press, 1985.

Griffiths, Antony. *The Print in Stuart Britain, 1603-1689*. London: British Museum, 1998.

Hamper, William, ed. *The Life, and Correspondence of Sir William Dugdale*. 2 vols. London: 1827; rpt. 2007.

Parry, Graham. *Hollar's England*. Salisbury: Michael Russel, 1980.

---. *The Trophies of Time*. Oxford: Oxford UP, 1995.

Roberts, Marion. *Dugdale and Hollar*. Newark: Delaware UP, 2002.